

新生沖縄県を祝い 祖国復帰記念

「波照間の碑」

建設事業推進



やぐらえ

第四号

沖縄が祖国日本から切り離されて二十七年、ようやく全国民の多年の願いがかない、この五月十五日に復帰することになりました。

この歴史的復帰を記念するため神青協を始め各有志青年団体と協力して、日本最南端の地「波照間島」に、青年の力と情熱によって記念碑を建設することが計画され目下着々と準備が進められている。神青協が担当する業務として、各県の由緒ある神社の玉石の収集と現地における除幕式の奉仕が予定されており、この事業推進あたって都神青選出の常任理事が受け持つて全面的な協力をしている。現地への奉仕には、斎藤(成)八木森田、蔵重、内田の諸氏が参加する事に内定し、新生沖縄県と祖国日本の一体化運動を盛り上げる。

碑文

この碑は、沖縄の祖国への復帰に際し、全国の青年が各地の石を持ちより、ここ、はてるまの地に精魂を注いで建設されました。

この一つ一つの石が、わが国の礎となり、沖縄の新たな出発となることを念じて、

昭和四十七年五月十五日

昭和四十七年度

東京都神道青年会定例総会

日時 昭和四十七年四月十二日

午後五時

会場 神社庁会議室

次第

- 一、開会
- 一、神殿拝礼
- 一、国歌斉唱
- 一、敬神生活の綱領唱和
- 一、会長挨拶
- 一、来賓祝辞
- 一、議事
- 1 昭和四十六年度会務報告
- 2 昭和四十六年度決算報告
- 3 役員改選(正副会長選出)
- 一、新会長挨拶
- 一、閉会

## 昭和四十六年度の運動をふりかえつて

会長 八木光昭

昭和四十六年度の活動を時間的に終えんとしている今、我々青年会の本年度の歩みはいかがなものであったか、謙虚なる反省を踏まえて次への飛躍への試金石とする為に、勇気をもった分析と内部構造への説明がなされなければならぬと思う。

本年度の活動の指針に我々は、青年会とは何か、青年会とは何の目的をもって、何のために組織されているかの原点に返って出発する必要があるという事を運動方針の基本線にすることをうたいあげた。とりもなおさずこの起点は、一昨年十月に執り行った創立二十周年の大会を大きな歴史的な接点としてとらえ、斯道興隆の先兵たらんとしたあの創立の精神の初心に返る事にほかならないものであった。ゆわばきわめて普遍的な言い方をすれば、青年神職としての使命感の自覚にほかならないものである。組織の充実と会員一人一人の意識の昂揚を主眼とする会則

改正を行った昭和四十五年の総会から内部構造への転向を經過しつつ迎えたのが昭和四十六年度の運動の基本的な姿勢であった。

## (一)

年度始めの顕著なる事柄は何んといつても全国の問題であった。

神道青年全国協議会の定例総会が六月に開催され役員任期の改選によって会長に兵庫県の加藤隆久氏が選ばれた。神社本庁の外部団体の一つとして事務局を本庁内に置き、執行体制を地元で担うべき神青協が、その役員構成において遠く地方に渡るといふ事は、青年団体の将来にとって大きな前進であったが、おおげさにいえば前代未聞ともいえた。その背景には各地の神青会の充実に伴って各ブロックの組織間の連携、意識の向上があったからで、これは地元都神青の力、意欲云々と評価されるものではない。

全国青年神職の意識の盛り上りをとらえた会則改正によって、全

ての神青が自分達の協議会であるという認識は神青協創立二十周年によって一層高められた。都神青としては、この時点において今迄の慣習的な中央偏重に固執しなかつたからにほかならない。

しかしその改選において地元としての態度が大きく注目され問われた事は事実であったが、我々はその新しい波の渦中におどる事なく、冷静に無久の姿勢をもって地元としての責務を果すべき態度を守った。故に役員決定後は、その要請に応じて支援協力の為に、宮西、森田両副会長、調査渉外部の滝、川合、山内、内田の委員を推挙したのであった。

時代的変遷を経つつ構成メンバーの若返りをはかり新しい血を必要とした都神青としては、全国に対して過渡期でもありその試練を自からに課したともいえる。しかしこのよき勉強の期間を経てやがてよき人材の治頭が望まれるならばそれが会長二期を含め長きに渡ってその重責を果した前会長齋藤成徳氏始め多くの地元先輩の苦勞に報いる為にも、我々神青にとっても真の実力として評価されるものになると信じる。

そして執行体制に勇躍参加した諸兄は、教化渉外等幅広い分野に地元我々と共に活発な行動に入つた。

毎年六月に靖国神社で執り行われる沖繩殉国学徒慰霊祭には、神青協の肩がわりとしてとどこおりになくその任を果し、又十一月に行われた北海道神宮に於ける北方国土復帰祈願祭には、まさに社務多忙をさいて参加し活発な街頭活動に迄その範をたれてきた。そして今年五月十五日に迎える沖繩祖国復帰を記念する事業には勇躍奉仕参加する準備が着々と進められている。(表紙参照)

## (二)

今年の研修関係の特長としていえる事は、講演会そのものの形を持つ事を改めた点にある。即ち、定時総会に於ける「生きる知恵」に對しての研究討論、又新年会に於ける「題名のない音楽会より学ぶ」のテレビ放映による趣向があつた。前者の「生きる知恵」は、まさに神社界にとって画期的な大衆誌の発刊であった。勇断をもってこの事業に着手した東京都神社庁としても、その傘下の一神職としても、いかにこれをよりよき社

頭の教化材料の一つとして活用していく為の真剣な討議が持たれた。我々は全神職にこの趣旨を呼びかけ時期を得た催しとしていたがそれほど参加者がなかった点はいささか以外であった。なにしろこの事業の正統性は歴然としていただけに小冊子として形を表わしたものに対処する苦悩の内質的な面が表われたと判断されるかもしれない。

新年会に際してのビデオテープによるテレビ放映は新しい趣向と解される。黛敏郎氏があの番組を介して大衆に語りかけている日本の伝統、日本人としてのあり方を説く精神を我々は学ばされた点がある。禊修練会についてはいまさらいうまでもない。青年会自から行うこの「行」の修練会を、実のあるものにするかどうかは我々自身の心の問題である。

大いなる研修を主眼点に進めた本年度事業の中に教養講座がある。六月には社務奉仕に関するものとして田中康彦氏から雑祭式の實務についての話を聞き、又十一月からは「神道神学について」の園大平井教授を介しての講座が持たれた。方針としては前者の話をに

つめて資料作製迄進めたいというのが狙いであったが、準備等の不足で中断の格好になり後者の形の講座へと移行したのであった。テーマを定め五回にわたった講座を終った今、今後この様な形の研修会の持ち方の是非が問われる。題目があまりにも必修課目であるだけに気軽にいく点もありはしないか。時代に即応した対象的にしほりつつ有益な勉強の成果を上げるむづかしさがある。

多くの対外活動にも活発に参加した中に独自の運動として取組んだものに国旗掲揚推進運動がある。それは前迄の方法を全く変え、建国記念日奉祝をより宣揚とするを折り組んだマッチを製作、前日の二月十日に渋谷駅頭に於ける配布活動を行った。準備の段階、時間的な面、方法、動員等に多々問題はあつたが、意欲ある会員の参加によってやれば出来る神青の力を如実に示した面であった。

多くの計画のうち親睦に関する事業の消化はスムーズに行われ、会員同志のむつびの滑油剤の役目を果しその実を上げ得たといえる。もっとつきすすめれば、会員の和、それに伴う年令差、いわば先

輩と若者とのいささかの違和感をいかにちぢめる事にあると思う。

(三)

さて長らく我々が取組んでいる氏青問題では、大きな躍進の時期にさしかかっているといえよう。

神青教化部を窓口としている東京都氏子青年連絡会は隔月ごとに会合を持ち、情報交換と親睦を重ね、来年に迎える氏青協十周年記念大会への参加の意義の滲透を積み重ねている。連絡会誕生当時五社にしかなかった氏青会も現在十二の数をみるにおよんだ。最近の結成躍進の原動力となつていゝものに大田区に於ける支部ぐるみの取組みの成果がある。ゆっくりではあるが伸長してきた氏青会自身は力と共に、一神青会だけの問題ではなく、神社界全体として問題意識をとらえんが為、連絡会より協議会への脱皮の時に来た事である。今年初の日枝神社の会合においてこの問題は提起され協議会への躍進の堰は切つて落されたといつてよいであろう。

(四)

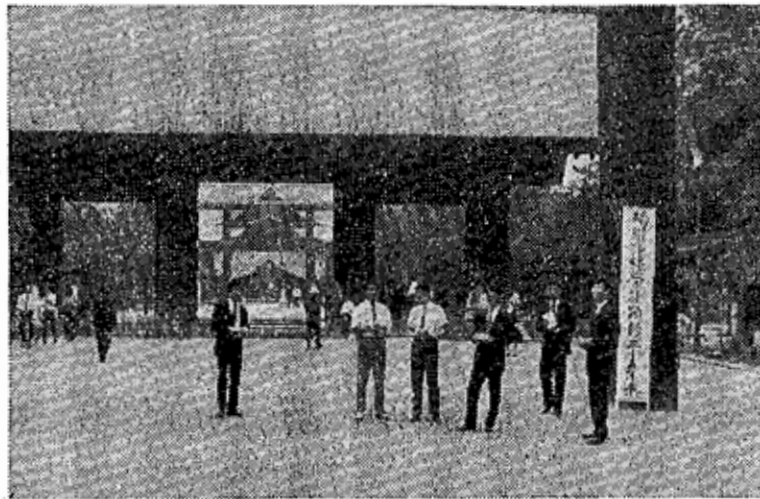
従前からそうであったが、我々は委員の各部配置により明確にし、各事業推進の中心をにないな

がら全員の協力の下に展開するを目標としている。改正により設定された部においてはこの期間は、性格、方針、運動に於て思索期でもあつたと云える。庶務会計を統合した総務にあつては正副会長と共に企画立案の密着度は強くあつてしかるべきであろうし、調査渉外部においては初年度では、部の性格そのものに苦慮したものがあつた。だがその中より生れたものは、都神青の意欲を鮮明ならしめる為の神青協への窓口を主眼としながら復帰した小笠原に関する調査探究等、その方向づけがなされてきたといえる。広報部の会報発行はまさに自分自身への研鑽そのものである。今回の第四号の経過を見ても、今後、事業の中で一番継続の困難さがあると見えるがそれを越えての努力が肝要であろう。名簿作製にしても会員意識の宣揚の為に無くし得ないと思う。

最後に会の原動力は委員一人一人の努力にほかならない。各自が自分達の会にいかほどの愛着と認識を持ちうるかである。選ばれ参画した二年間に於て青春の若き情熱を奉仕の精神でつらぬく事は決して無駄にはならない得がたいものがあると信ずる。

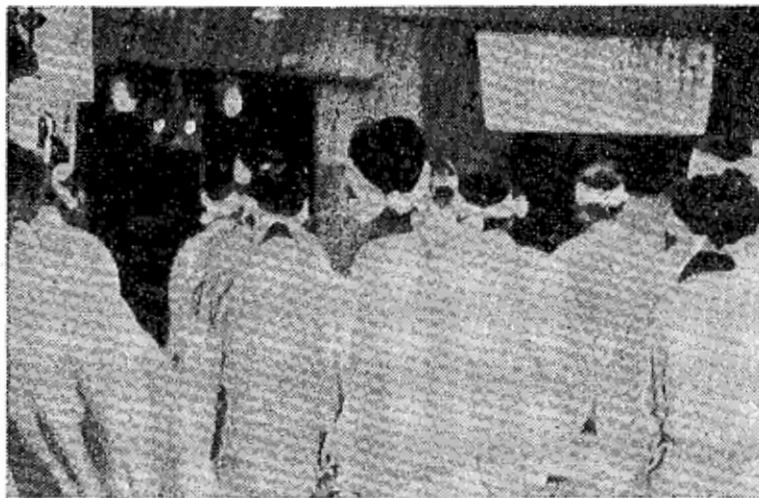
# 昭和四十六年度 会務報告

- 4・13 役員会(王子神社)  
四十六年度活動方針の示唆
- 4・17 神青、氏青連絡会  
本年度の活動協議(神社会館)
- 4・23 二十周年沿革史編集会
- 4・26 委員会(神社庁)  
四十六年度活動方針、総会への準備
- 5・12 定期総会(神社庁)  
前年度事業報告、決算承認  
四十六年度活動計画、予算案、原案通り可決成立  
大衆誌「生きる知恵」を考える  
公開研究座談会、四十名
- 5・23 神社本庁二十五周年記念大会―神社関係物故者慰霊  
祭助務青年会より鏡、高島大野)
- 5・26 二十周年沿革史編集会  
(座談会取材)神社庁
- 6・4 二十周年沿革史編集会  
(白鬚神社)
- 6・11 教養講座(神社庁)  
雑祭式等の実務について  
発題者天祖神社宮司田中康彦氏 四十名出席



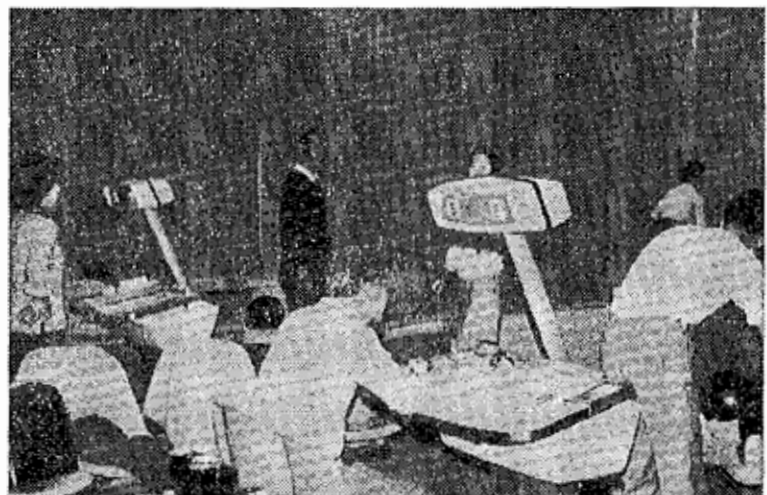
(沖縄復帰と靖国神社国家護守運動)

- 6・11 委員会(神社庁)  
各部署事業計画実施について
- 6・18 関東地区神道青年会総会  
(山梨県甲府市) 会長外五名参加
- 6・18・19 懇親旅行(箱根湯本清光園) 二十三名
- 6・21・22 神青協第二十三回総会  
(神社本庁) 会長外五名
- 6・26 殉国沖繩学徒顕彰慰霊祭  
参列(靖国神社) 三十五名



(禊 修 鍊 会)

- 7・20 神青、氏青連絡会(貴船神社)
- 7・28 東京都神道人野球大会  
神青チーム五位に終る
- 7・30 委員会(神社庁)  
禊鍊成会開催について
- 8・6・7 禊鍊成会(武州御嶽山)  
(講師) 国大教授小野祖教氏から禊―抜い罪けがれについて 参加三十四名
- 8・25 関東地区神社庁野球大会
- 9・2 二十周年沿革史編集会  
(十二社熊野会館)



(ボ ー リ ン グ 大 会)

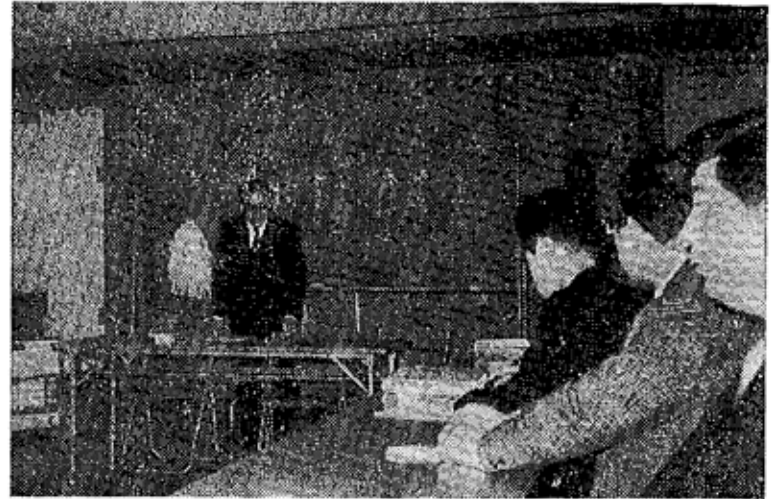
- 9・4 神青協理事会(日枝神社)
- 9・9 二十周年沿革史編集会  
(高円寺氷川神社)
- 9・22 二十周年沿革史編集会
- 9・23 委員会(神社庁)  
各部署事業推進中間報告
- 9・25 蒲田八幡神社氏子青年会  
結成、祝電
- 10・5・6 神青協中央研修会(滋賀県多賀大社) 会長外二名
- 10・20 ハゼ釣り大会(浦安沖)
- 10・25 ボーリング大会(渋谷) 神青、氏青親睦大会
- 10・29 二十周年沿革史編集会  
(王子神社)



(北方国土復帰祈願祭)

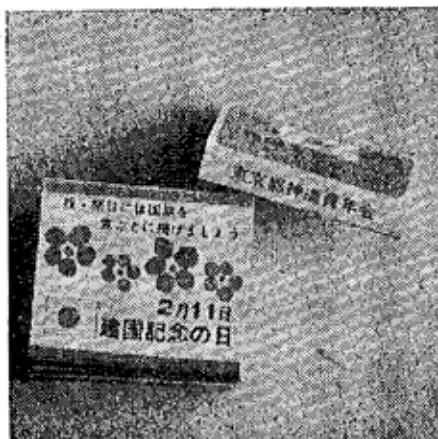
- 11・7 北方国土復帰祈願祭参列  
(北海道神宮) 札幌市内に於てピラ配り敬蒙活動(八木、森田、宮西、山内)
- 11・18 教養講座(神社庁) 第一回「神道神学について」講師国大教授平井直房氏一連のテーマで五回に分け始めまる
- 11・20 「沖繩を暖かく迎える会」に参加(共立公会堂)
- 11・29 神青、氏青連絡会(忘年会) (高円寺氷川神社) 神社本庁奉賛部長嶋津正三氏より伊勢神宮式年遷宮について講話

- 12・23 忘年旅行会(熱海ホテル大洋) 参加者三十一名
- 12・7 教養講座(神社庁) 神道神学について第二回
- 12・22 二十周年沿革史編集会 (奥沢神社)
- 1・13 新年会(神田神社) ビデオテープテレビ放映による「題名のない音楽会より学ぶ」九十名出席
- 1・18 教養講座(神社庁) 神道神学について第三回
- 1・23 大田区氏青連絡会発足 (沢田浅間神社)
- 1・25 二十周年沿革史編集会



(教養講座)

- 2・10 国旗掲揚推進運動 (王子神社)
- 2・11 建国記念日中央奉祝行事 (愛宕神社集合)
- 2・18 神青、氏青連絡会(新年会) (日枝神社)
- 2・23 教養講座(神社庁) 氏青協十周年記念大会参加動員について
- 2・26 全国神社青年会議所(本社本庁) 会長外五名
- 2・27 品川神社(座談会取材)
- 3・3 品川神社(座談会取材)
- 3・6 ボーリング大会(大崎)
- 3・11 12 関東地区氏子青年研修会(千葉県佐原) 六名参加
- 3・16 二十周年沿革史編集会
- 3・16 役員会 (王子神社)
- 3・21 教養講座(神社庁) 神道神学について(第五回) 委員会 (神社庁)
- 3・21 二十周年沿革史編集会 (王子神社)
- 3・28 二十周年沿革史編集会 (王子神社)
- 3・29 会長候補者選考委員会
- 3・31 会報「やくわえ」第四号発行



(国旗掲揚推進運動の一環)

# 全国神社青年会議に出席して

東京都氏子青年会会長

三 木 鉄 也

去る二月二十六、二十七日の二日間、神社本庁に於て開催された「第二回全国神社青年会議」に、東京都の代表として出席致しましたので、御報告を兼ねて、今後の氏子青年活動について感じたことを述べさせていただきます。

今回の全国神社青年会議は、第一回の継続として、「神社青年活動の展開」という主題のもとに、神社本庁白井副職長の基調講演があり、その後、三つのテーマに別れて研究討議が進められました。  
(一) 祭りの場における青年活動—私達都会に住む青年の多くは地域のサークル的な活動には目を向けるが、こと神社に対しては関心が無い。このことから数多くの若人をいかにして神社に関心を持たすかが問題点となる。  
それには、神社に於てレクリエーション的行事を継続し、徐々に神社に対して関心を持たすのも、一つの方法と考えられる。現にこの

方法は多くの氏子青年会で実行され、効果をあげている。最初からむずかしいことを述べても、現代の青年はなかなかついて来ないと思う。

(二) 神社青年のリーダー養成の検討—神社界の青年運動のリーダーは青年神職である。はたしてすべての青年神職が青年運動のリーダーとしての使命感と、実力を有しているであろうか。神社界の青年運動に、飛躍的な盛り上りを期待するならば、まず青年神職の自覚と研鑽が必要とされよう。

(三) 神社関係青少年育成の展開—神職自身が育成活動の先頭に立つこと。ボーイスカウトやガールスカウト、子供会などを組織し、そして成長したものを氏子青年会に結びつける方法が、非常に効果的と思われる。  
以上紙面の都合で簡略ながら、報告にかえさせていただきます。

# 東京都神道青年会二十周年史出来上る

東京都神道青年会二十年の歩みを綴った沿革史がようやく出来ました。昭和四十五年十月三十日には、創立二十周年記念大会を挙行し、二十周年の意義をかみしめると共に斯道興隆への誓いを新たに致しました。

そして直ちに記念事業の一つ、記念誌の編纂に着手しておりました。その編集にあたっては、全く青年会自らの手で作り出す事を意図し作業を進めました。なにして二十年の歳月の経過は、考えるほど容易なものではなく、年表など資料収集にあたっては苦慮致しました。企画から原稿依頼、写真資料収集選択、座談会、割り付け等

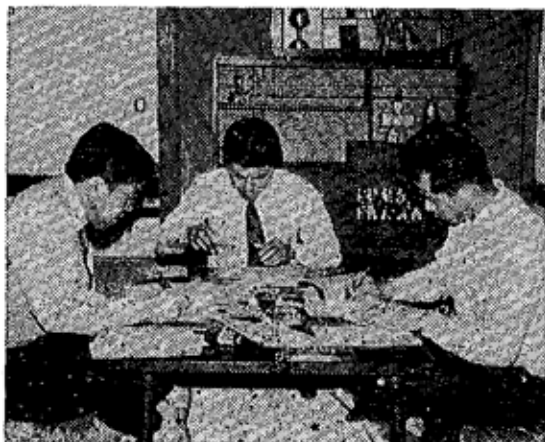
お互いに多忙なからだの中で進める事だけに、やたらに時間だけが過ぎ去っていく感じであせりがちにもなりがちにもなりましたが、十数回にわたる編集会議を経てここに入稿することが出来ました。

内容は、我々の先輩同志がいかにこの道の為に身を費やしてきたかという運動史に基きながらユニ

ークさを盛り込み親しみのもてる記念史にしてあります。

本の体裁は、B5版、横開きで二十周年記念大会の模様から始まり、協議会として発足にいたる迄の経過から青年会として力強く歩んできた歴史を、先輩の思い出や座談会による裏面史というべき裏話、年表等を盛り込んだ四十八頁にわたっております。

いづれ会員各位のお手許に届くこの書より一人一人が何ものかを汲みとり、今後の活動の指針となる事と願っております。



(編集作業)

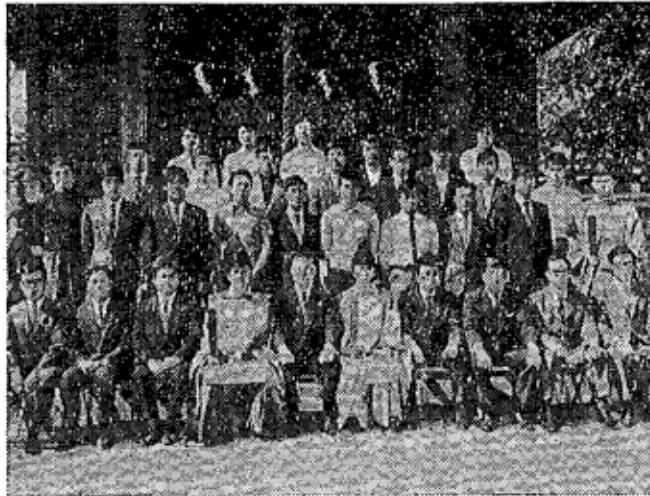
# 氏子青年会紹介その二

東京都氏子青年連絡会が発足した昭和四十二年には、六団体しか加盟のなかった氏青会も、ここ一兩年の間に相次いで結成が見られその数は倍増するにいたった。

最近、神社本庁においては、昭和四十六、四十七年とつづいて全国神社青年会議を開催し、又今年は青年対策担当者研修会も持たれ各県神社庁に青年対策担当者が設置され今後の躍進が期待される。ここでは、その後の新結成の氏青会を逐次紹介し参考に供するしだいである。

## 貴船神社 氏子青年会

(所在) 大田区大森東三ノ九ノ一  
九(会長) 中曾根忠(会員) 六十五名(活動) 常任委員会を中心に事業、財務、広報、企画部の設置、例大祭奉仕、名簿の作成、会員の近況調査、街の美化運動、会報の発行、夏期早朝ラジオ体操、バスによるリクリエーション、新年会、神青氏青連絡会への参加、全国氏青大会への参加、大田区支部氏青協議会との協賛、氏神を中心とする精神生活の確立を主眼として活動を行っている。



(結成大会)

## 菫田神社 蒲田八幡神社 氏子青年会



(結成総会)

(所在) 大田区蒲田四ノ十八ノ十一(会員) 一一〇名(会長) 浦英司(活動)  
① 祭典神事奉仕—菫田神社、蒲田八幡神社例大祭行事奉仕  
② 研修親睦事業—新年会、成人式餅つき大会、神社参拝ハイキング各種講演会講習会、各種クラブ活動の活発化  
③ 社会奉仕事業—交通安全事業、建国記念の日、子供の日  
④ 関係団体への参加—全氏青協大会への参加、ボイスカウト活動へ協力

## 浅間神社 氏子青年会



(月例会風景)

(所在) 大田区大森西二ノ二ノ七(会長) 田中弥次右衛門(会員) 四十六名(活動) ①組織活動②研修親睦活動—新年会、忘年会、神社参拝と懇親旅行、講習会、研修会、ドライブ、趣味サークル活動  
③例大祭奉仕—年中行事への参加  
④広報活動—ポスターパンフレット作成、会報の編集、⑤名簿の作成。  
目下組織拡充を主眼に入会希望者受入れ促進中。

## 国体護持についての私見

渡 辺 和 寿

悠久の古へより、我大和民族と一心共同体なる神ながらの道は、我  
国国体の基であり、民族一心同体  
たる基本原理でもある。

そもそも我国体は、万世一系の  
天皇の知ろしめし此の皇国が、本  
は天皇より末は全ての国民に至る  
まで、睦び和みて一体となり、国  
土経営をするところにある。それ  
には道を守らねばならぬ。道とは  
教育勅語の皇祖皇宗の遺訓と云う  
事である。この神ながらの道は、  
我国体の基本であるばかりでなく  
人類不偏の道でもある。「之ヲ古  
今ニ通シテ悖ラズ、之ヲ中外ニ施  
シテ謬ラズ」と教育勅語にも示さ  
れている通りである。大東亜戦争  
敗戦以来、我国の国民教育の最大  
の欠陥は、教育の基本理念として  
の教育勅語の廃止にある。これこ  
そ我国体に対する重大なる挑戦で  
あり、まさに国民無精神奴隸化対  
策と言わねばなるまい。

終戦の詔勅を拝し奉るに、その  
精神はかの非常時に於ける陛下の  
切なる国体護持の大御心でなくて

なんでありましょうか。しかるに  
敗戦より二十有余年の歳月を経た  
今日、経済的には世界屈指の大国  
となりし我国内に於ける世の乱れ  
は、建国の理想もなければ、一心  
共同体たる大和心も日に日に滅却の  
一途を辿っていると見えよう。

物質の享樂に溺れ、刹那的快樂  
を満喫し、明日への希望を失った  
青少年の何と多い事か。人の生命  
は我親を通しての大生命の賜であ  
り、些かも疎かにしてはならない  
その様な尊い生命を祖国日本の  
為、現代の享樂に酔いしれている  
人達に自分の生命をかけてまで救  
おうとした憂国の士に対してまで  
も、政府は狂気の沙汰の一言で片  
ずけて仕舞った。政治のだらしの  
なさを棚に上げ、愛国の至誠をた  
った一言でかたづけられては、自  
分の生命をかけた士はどの様な思  
いであろうか。察するに忍びない  
時恰も昭和四十八年には、神宮  
の式年遷宮祭が行われようとして  
いる。心ある国民の赤心あふるる  
浄財が寄せられているが、前回の

第五十九回の時は、我国独立して  
日浅く国民の経済生活は苦しい時  
期であった。しかし現在はどうで  
ありましょうか、米国に次ぐ第二  
の経済大国と言われ、国民の生活  
も豊かになっている今、この御遷  
宮が国家の公事として行われな  
いならば、我国家史上にまれに見る  
大きな汚点を残すものと思う。

「本たつて道生ず」のたとえ通  
り、今日我々の常に関心のある、  
靖国神社国家護持、又陛下御渡  
の際の劍靈御動座の件にしても、  
神宮の御遷宮が国家の公事として  
行われるならば他の重要問題も自  
然と道が開らけよう。もしこの事  
をなおざりにし、他の問題に手  
を出しても決して根本的な解決にな  
らないのは当然と云えよう。

昨今政界、財界から労働界全て  
にいたるまで右往左往している。  
その様な時、しっかり自己を見  
つめ社会を見、国を見守って一心  
同体たる神ながらの心で、我国家  
を護ろうとする青年が今やその活  
動を起興し始めなくてはなりません。  
それはマスコミで騒ぐ様な、  
右でもなく、無論左でもありませ  
ん。常に正中の道を守り、皇室を  
中心とした我国の国体の中に一つ

となり、お互を生かし合う社会人  
学生でありましょう。しかしその  
胸の底には、切々たる愛国の情が  
燃えていて、国乱れて忠臣出ず”  
の諺の通りこの様な時、真の愛  
国者が出なければなりません。

益々、国体の精華を光輝あるも  
のと致したいと存する次第です。

(銀杏岡八幡神社 権禰宣)

### 編集後記

本号の発行がとおとお年度末に  
なつてしまい担当者として誠に遺  
憾に思ひお詫び申し上げます。  
会報の使命を思う時、お互いに  
素人同志の仲でいかに手早く行動  
するかが課題であるかを肝にめい  
じたいです。  
年度が變つて新しい編集スタッ  
フのもとでは、関係者の意欲的な  
協力を得て充実あるものが出来る  
よう祈るしだいです。

(山本)

昭和四十七年三月三十一日

東京都神道青年会

東京都港区元赤坂二―二―三

東京都神社庁内

電話(408)二三六一・九二七七